

茨城県玉造町

三昧塚古墳発掘調査報告書

1995

玉造町教育委員会
三昧塚古墳発掘調査団

序

茨城県の南東部に広がる湖、霞ヶ浦に面している玉造町は、町中央部を梶無川が流れ、北西には鎌田川があり、小川町と町境をなしています。古くから農業が発展した地域で今でも台地では畑作を、沖積低地では稻作やイチゴ栽培が盛んに行われています。

このように私たちの郷土は古くより人々の生活の場となり、そこには幾多の歴史が残されています。現在でもその人々の生活の痕跡として、貝塚や古墳・城館跡等の遺跡が町内に数多く点在しています。

玉造地方の古墳文化は、勅使塚古墳の出現によって幕を開け、三昧塚古墳・権現山古墳、その後、大日塚古墳が沖洲集落を中心とする鎌田川流域の台地や沖積低地に築かれ、沖洲古墳群を形成しています。

三昧塚古墳は、昭和30年早春、築堤用土砂の採取工事に伴い、大塚初重氏（当時明治大学助手）と川上博義氏（当時県社会教育課文化財担当）等によって、急きょ発掘調査が行われました。その折り、馬形飾付金銅冠をはじめ、短甲、冑、馬具等貴重な遺物が出土しております。

このように考古学上重要であり、かつ、郷土の貴重な文化財である三昧塚古墳を修復整備し、学習の場とし活用をすすめ、郷土の誇りと郷土愛を育む、歴史拠点として整備するため『三昧塚古墳環境整備委員会』が組織されました。

そこで、「三昧塚古墳保存整備基本計画」策定に伴い、その基礎資料を得るために発掘調査が必要となりました。この調査に際しましては、明治大学の全面的なご支援をいただき、所期の目的を達することができましたことに感謝申し上げます。

最後になりましたが、大塚初重先生、小林三郎先生をはじめ、明治大学関係各位の深いご理解とご協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。また、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課・茨城県立歴史館、沖洲区長の狩谷良氏をはじめ地元の関係各位に心から厚く感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

平成7年3月

玉造町教育委員会

教育長 島 田 隆四郎

序

茨城県行方郡玉造町沖洲に所在する三昧塚古墳の調査が行われたのは、昭和三十年の三月のことであった。

しかし、その発端は実に悲しい事情によるものである。農林省主導による小川地区干拓堤塘工事のため、現場近くに所在した三昧塚古墳が不幸にもその土取りの対象とされたのであった。地元からの通報により、当時の文化財保護委員会の斎藤忠技官がその保存につとめるべく県および地元との折衝をしている間にも、墳丘は切り崩され、人物埴輪や動物埴輪が山のように積まれてゆくという状況であった。結局、工事の中止は断念せざるえず、記録保存を講ずることになった。

上取り工事が進行してゆくなか、墳丘の測量・埴輪列の確認というように残された古墳の姿を記録することに終始する日が続いた。そして、東国の大古墳文化のなかで三昧塚古墳の性格をつよく印象づける結果となつた馬形飾付金銅冠をはじめとするあの豪華な副葬品の数々の出土をみたのである。

調査がおわって現地をあとにしてからも、無残にとりのこされた三昧塚古墳の墳丘に心いためる日々がながくつづいていた。

平成六年の冬、玉造町より三昧塚古墳の整備の計画を聞いたときには、このような経緯から、その趣旨におおいに賛同するとともにその実現にむけて協力を惜しまないことをつたえ、春休みの間ではあったが大学院・学部学生とともに調査にあたることになった。埴輪等の配列はすでに失われてしまつて成果をあげることができなかつたが、墳丘の規模確認の結果は、昭和三十年の時点の所見とほほ同様であり、これを再確認することができた。

調査にあたつては玉造町当局をはじめ沖洲地区の方々とりわけ沖州区長の狩谷良氏にお世話になることがおおきかったことを明記し、感謝の意を表したい。また、昭和三十年に出土した埴輪の紹介のため資料を貸し出して頂いた茨城県立歴史館にもあわせて感謝の意を表したいと思います。

明治大学文学部教授

大塚初重



1955年 石棺調査中の一コマ

例　　言

1. 本書は「三昧塚古墳保存整備基本計画」に際して基礎資料を得るために、茨城県玉造町沖洲467-1地に所在する三昧塚古墳の発掘調査報告書であり、1955年（第1次）調査について第2次調査にあたる。
2. 発掘調査は、玉造町教育委員会が主体となり、三昧塚古墳発掘調査団を組織し、明治大学の協力を得て行ったものである。
3. 調査期間は、1994年3月19日より4月6日までの延べ19日間である。
4. 調査面積は約130m²である。
5. 遺物整理は玉造町教育委員会が行い、報告書作成は明治大学が行った。
6. 本報告書の編集は大塚初重、小林三郎が行い、新井悟、加藤俊吾、高橋幸治、田村隆太郎の協力を得た。
7. 本報告書の執筆は以下の通りである。

第1章 池畠正夫 第2～4章 新井悟、加藤俊吾、高橋幸治、田村隆太郎

第5章 パリノ・サーヴェイ株式会社　まとめ 小林三郎

8. 調査に関わる遺物は玉造町中央公民館、図面・写真は明治大学において保管されている。
9. 調査および本調査報告作成にあたって、パリノ・サーヴェイ株式会社の辻本崇夫、北斗開発の山岸義典氏には多大なご協力を賜りました。
10. 三昧塚発掘調査は、三昧塚古墳発掘調査団として下記のものが担当し実施した。

団長 大塚 初重 明治大学理事・文学部教授

副団長 小林 三郎 明治大学文学部教授

副団長 島田隆四郎 玉造町教育委員会教育長

主任審査員 星 龍象 現眞壁町歴史民俗資料館

調査員 新井 悟 明治大学大学院学生

　　加藤 俊吾 明治大学大学院学生

　　高橋 幸治 明治大学学生

　　田村隆太郎 明治大学学生

　　原 喜代子

カメラマン 松本 雅春 プロカメラマン

事務局 池畠 正夫 玉造町教育委員会

　　小谷 和弘 玉造町教育委員会

　　郡司 辰之 玉造町教育委員会

調査補助員 赤塚ヨシ子 秋山岩勇 飯島芳江 石津久雄 石橋たま 伊藤友成 井野文子

　　井野明香 井野よね子 井野リヨ 今川国治 今川本子 今川陽子 梶じん子

狩谷敏子 狩谷 良 木村和男 久保實員 鈴木光枝 塚本秀信 塚本正敏

塚本八重子 塚本好明 永峰泰 根本ゆき 橋本きぬ 橋谷修一 嘴谷善次郎

嘴谷 守 嘴谷みね 羽生一男 羽生唯夫 原喜代子 前田チヅ子 政所広悦

箕輪京子 森戸悟司 安田ひろみ 安田ゆかり 渡辺純子 今川由香利 鈴木初代

飯島広恵

調査協力者 飯島伸一 井野光夫 海老澤幸雄 狩谷良 高塙栄治 塚本晃 塚谷敏雄

凡　例

1. 周辺遺跡分布図には国土地理院発行2万五千分の1地形図「常陸玉造」「常陸高浜」を利用した。
2. 掘図中に使用した北は座標北である。
3. 遺構・遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
 - 墳丘測量図・復元図 1/1000 セクション図 1/50 (1トレンチは1/100)
 - 円筒埴輪(完形・底部) 1/4 その他の遺物 1/3
4. セクション図中の↑は墳壠を示し、太線は現地表面を示す。
5. 遺物断面にスクリーントーンをかけたものは須恵器を示す。
6. 遺物の写真図版中の番号は図版の番号と同じとする。

抄　　録

フリガナ	サンマイヅカコフンハツツヨウサホウコクショ						
書名	三味塚古墳発掘調査報告書						
発行者名	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会						
所在地	茨城県行方郡玉造町甲404 玉造町教育委員会						
編集者名	大塚初重、小林三郎						
編集機関	明治大学						
所在地	東京都千代田区神田駿河台1-1						
発行年月日	1995年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　一　ド	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市　町　村	遺跡番号				
三味塚古墳	茨城県行方郡玉造町 沖洲467-1他	08425	県　番 39.50 町　番 58	36° 09 07	140° 22 08	1994 3.19 1994 4.7	130m ² 三味塚古墳環境 整備に伴う発掘 調査
所収遺跡名	種別　時代	主な遺構	主な遺物				
三味塚古墳	墳　墓　古墳	前方後円(墳丘・周堀)	埴輪片(円筒・形象) 土師器片(高杯・壺・甕・台付甕・壇) 須恵器片(杯・蓋・甕)				

目 次

序	I
序	II
例 言	IV
凡例・抄録	V
第1章 調査に至る経緯	(池島 正夫) 1
第2章 地理・歴史的環境	(新井 悟) 2
第3章 1994年の調査について	3
第1節 墳丘の測量調査	(新井 悟) 3
第2章 墳丘の発掘調査	6
1) 前方部	(加藤 俊吾) 6
2) 後円部	(加藤 俊吾) 7
3) 周囲および外堤	(加藤 俊吾) 7
第3節 小 結	(田村隆太郎) 10
第4章 遺物について	12
第1節 墳 輪	(高橋 幸治) 12
第2節 土 器	(田村隆太郎) 13
第5節 三昧塚古墳築造前後の古環境	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 18
ま と め	(小林 三郎) 21
写真図版	

挿図目次

第1図 囲辺の遺跡	2
第2図 1994年測量図	4
第3図 1955年測量図	4
第4図 1955年以前測量図	5
第5図 第3図・第4図の合成図	5
第6図 各トレンチ土壠断面図	8・9
第7図 墳丘復原案図	11

第8図 1955年、1994年出土主要遺物（1）地輪	14
第9図 1994年出土主要遺物（2）埴輪、須恵器	15
第10図 1994年出土主要遺物（3）土師器	16
第11図 各トレンチの主要珪藻化石群集	19
第12図 各トレンチにおける植物珪酸体組成	19
第13図 各トレンチにおける植物珪酸体組成	19
第14図 三昧塚古墳出土馬具装着状況復原図	23

表 目 次

第1表 1994年出土主要遺物観察表	16・17
--------------------	-------

写真図版目次

第1図版 航空写真	
第2図版 三昧塚古墳前方部トレンチ	
上 第1トレンチセクション（西より）	
下 第6トレンチセクション（西より）	
第3図版 三昧塚古墳後円部トレンチ	
上 第3トレンチセクション（東より）	
下 第4トレンチセクション（南より）	
第4図版 三昧塚古墳後円部トレンチ	
上 第2トレンチセクション（南より）	
下 第5トレンチセクション（西より）	
第5図版 出土埴輪	
上 1994年調査出土円筒埴輪片（表面）	
下 1994年調査出土円筒埴輪片（裏面）	

第6図版 出土地輪	
上 1994年調査出土形象埴輪片	
下 1955年調査出土円筒埴輪	
第7図版 硅藻化石	
第8図版 花粉化石（1）	
第9図版 花粉化石（2）	
第10図版 植物珪酸体・材の顕微鏡写真	

第1章 調査に至る経緯

三昧塚古墳は、町北西部、玉造町沖洲に所在し、小川町境の沖積地に営まれた前方後円墳であり、鎌田川河口付近で、川と霞ヶ浦が造りだした洲を利用してできた低地型古墳である。

残念なことに、昭和30年築堤工事のため三昧塚古墳の土が運び出され、現在、墳丘部は半分以下しか残されていない現状である。しかし、この時、緊急に行われた発掘調査により、主体部が盗掘を免れていたことなどにより、馬型飾付金銅冠をはじめとし多くの重要な学術資料が得られたことは幸いだった。

このように考古学上貴重な文化財である三昧塚古墳を町は保護保存を図るために、平成2年3月に墳丘部用地買収、平成2年8月町指定史跡として指定し、さらに見学者用の駐車場として整備をすすめてきた。

また、削平された墳丘部の一部に沖洲地区の住民の皆様の協力で「お花畠」がつくられ、訪れる人々を楽しませてくれている。

この度、考古学上重要であり、かつ、郷土の貴重な文化財である三昧塚古墳を学習の場として、郷土の誇りと郷土愛を育む歴史的拠点として整備をすすめるため、平成5年度『三昧塚古墳環境整備委員会』を組織し、三昧塚古墳の保存整備をするための基本計画を策定することとなった。そこで基本計画の策定にあたり、墳端の位置確認、周堀外縁の位置の確認調査が必要となつた。

茨城県教育庁文化課の指導の下、町指定文化財の現状変更について町文化財保護審議会の承諾を得、発掘調査をする運びとなった。

以上のような諸条件を踏まえ、明治大学の指導協力を得ながら、玉造町教育委員会が主体となり、1994年3月19日から4月6日の間調査を実施するに至った。



第2章 地理・歴史的環境

三昧塚古墳は玉造町沖洲の沖積地に所在する前方後円墳である。沖積地の背後には行方台地がせまり、古墳の南東方向の台地の裾より北西方向に派生する微高地の突端に、堀をきることによって周囲とは隔絶して三昧塚古墳が立地する。古墳の南方向には霞ヶ浦がせまり、霞ヶ浦より眺めると三昧塚古墳の側面形が一望できる。また古墳の北側には、鎌田川が流れている。

この地域での集落遺跡の調査例はまだないが、これと反比例して、この地域では古墳の存在が古くから注目されている。三昧塚古墳から南東方向に1kmはなれた台地の縁辺には4世紀末に比定される前方後方墳の勅使塚古墳が立地する。この東国でも初期の古墳と5世紀後半に位置づけられる三昧塚古墳との間をうめる古墳は判明していないが、三昧塚古墳の西側にかつて存在した富士見塚古墳（円墳、箱式石棺）が5世紀代にさかのばる可能性もある。前方後円墳の権現山古墳、帆立貝式古墳の大日塚古墳といった古墳の年代も今のところ明確ではない。



第1図 周辺の遺跡 (25000:1)

- 1 三昧塚古墳 2 勅使塚古墳
- 3 権現山古墳 4 大日塚古墳（帆立貝式）

第3章 1994年の調査について

第1節 墳丘の測量調査

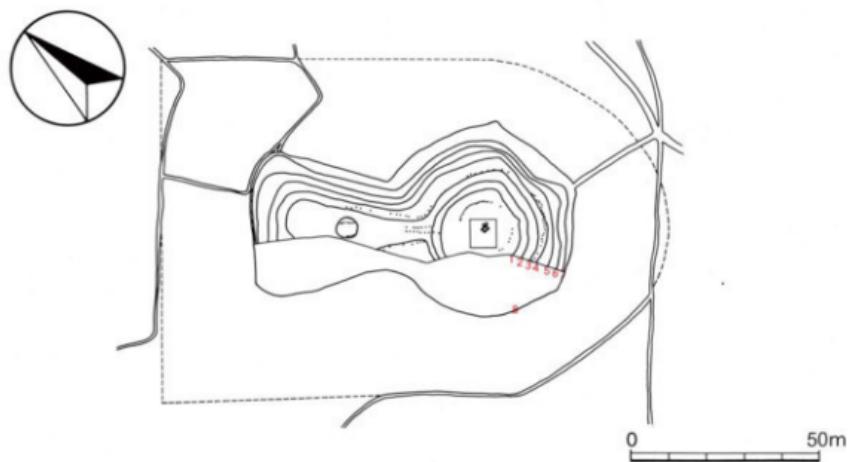
今回の調査は、発掘調査により墳据を明確にして、墳丘の規模を確定することに主眼がおかれた。それに先立ち、古墳の現況を記録することを行った。これには次の2点のことが目的としてあった。ひとつは、茨城県教育委員会『三昧塚古墳』(1960)にのせられた1955年の調査時の墳丘測量図(第3図)に今回の調査トレンチの位置を組み込むこと。ひとつは今回の調査に際して明治大学考古学研究室に残された三昧塚古墳関連資料を調査中に発見された1955年以前の、墳丘が削平される以前の墳丘測量図(第4図)と1955年の墳丘測量図ならびに今回の測量図(第2図)との対応関係を確認することであった。

ただし、今回作成の測量図とそれ以前の2つの測量図とは、コンターラインや水田の畦などを参考にしてもその重なりに許容範囲以上の誤差が含まれることが判明したので、墳丘部分の測量図の合成は基本的には断念し、今回作成の測量図の周辺地域に1955年以前の墳丘をのせることにとどめた(第5図)。この場合にも一定の誤差がふくまれることはいうまでもないがあえてそれを行ったのは三昧塚古墳の完好的な墳丘が記録された1955年以前の測量図を公表し、参考材料として供するための意味があった。(とくに、この測量図は当時の明治大学考古学研究室によるものでないことはあきらかであり、といって現在ではその測量者が判明しないのでなおさらのことであった)

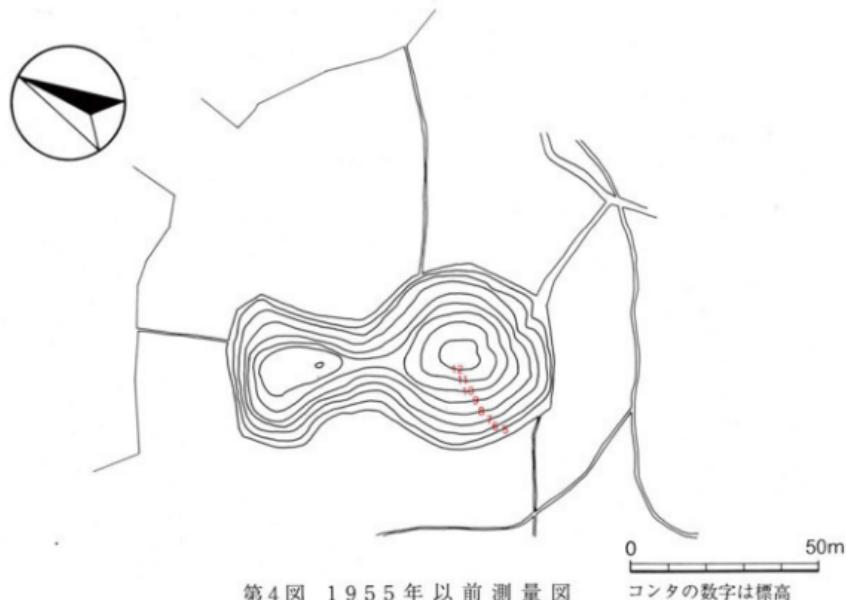
今回の墳丘の測量調査の結果は、墳丘長85.0m・後円部径47m・前方部幅36.5mであった。これは、1955年の調査時の所見と大差のないものであった。ただし、現在みられる後円部の高さが6mであるということは、1955年の調査時の所見とくいちがうものである。おそらく、1955年の調査終了後にもすすんだと考えられる削平によるものであろう。原形にちかいデータという意味では、1955年の調査時の所見を採用するべきであろうと考えられる。

また、1955年の調査時の測景図と1955年以前の測量図との合成の結果は、第5図のとおりであり、三昧塚古墳のうしなわれた墳丘を復原するために重要な参考材料ということが判明した。

なお、発掘の結果判明した墳丘の規模は、墳丘長85.0m・後円部径49.5mであり、後円部径が測量の結果と異なった。

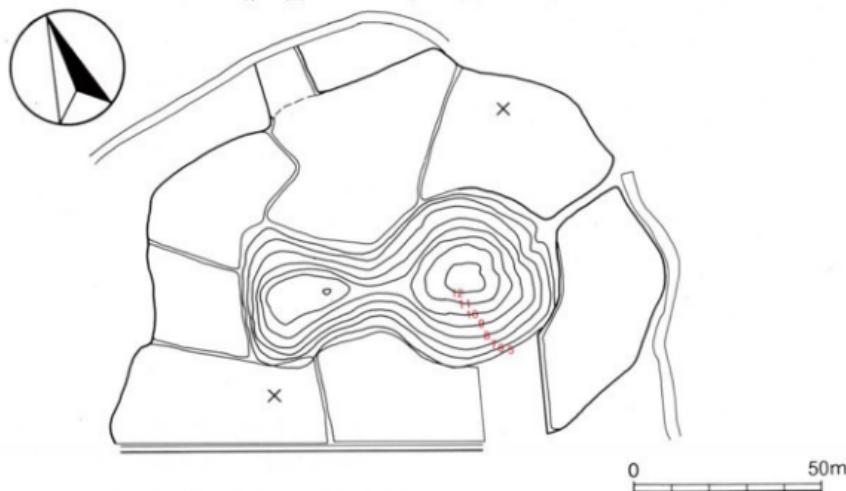


第3図 1995年測量図（茨城県教育委員会『三昧塚古墳』1960より改変トレース）



第4図 1955年以前測量図

コンタの数字は標高



第5図 第3図・第4図の合成図（墳丘は第4図のものをそのまま採用した）

第2節 墳丘の発掘調査

三昧塚古墳は、1955年茨城県耕地課の所管事業として、霞ヶ浦の沿岸の小川地区干拓堤塘工事のため、築堤用土砂の採取場にあてられた。今回の調査が行われるまで、発掘による墳據などの確定はされていない。そこで今回の調査では、墳據・周堀を確定し、墳丘全長・後円部径・前方部長の確実なデータを把握することを目的とした。

1) 前方部（図6-1・2写真図版2）

前方部前端主軸より北東へ7mに第1トレンチ（27×2m）、同主軸より北東へ17mに第6トレンチ（3×5m）を設定した。前方部前端の墳據、周堀の確定が目的である。

1トレンチ第1層は、概観上墳丘と思われるが、昭和30年以降に盛られた土である。1トレンチ第9層からは縄文土器の破片が出土しており、周堀より下層は自然堆積層であることがわかる。周堀の深さは約30cmとさほど深くなく、他のトレンチと比べても大差はない。墳丘は、1トレンチ第8b層から下、6トレンチ第9層より下が地山になる。他のトレンチ同様に墳丘下の砂層が水の通り道となっており、色調の変化がみられ、それで分層した層（点線）がある。1トレンチでは後世の削平により盛土はみられなかった。6トレンチでは、第2層が後世の盛土（攪乱）で、墳丘盛上の第8層上面を削平している。その下の第9層が旧表土で、土師器片が多く出土した層である。

1トレンチの崩落状況は、6トレンチほど明瞭ではなく、墳據の確定もやや難しい状態であった。墳據の標高が6トレンチとほほ変わらないであろう事も合わせて、↑の部分が墳據と考えられる。6トレンチは、第4層・第6層・第7層は崩落層で、墳據標高は2.882mである。1トレンチの墳據標高は2.781mで、両トレンチの差はほとんどなく、ほほ水平であるといってよい。しかし、6トレンチの墳據と1トレンチの墳據を復元的に直線で結ぶと、前方部前端は主軸に対して垂直にはならず、両トレンチの間で約1.5mのいざれが生じる。前方部の形を決める上で今後の調査に重要な課題を残すことになった。

2) 後円部（図6-4～6、写真図版3上・4）

後円部後方端に第2トレンチ（6×2m）、主軸直行方向の北側に第3トレンチ（5×2m）、南に第5トレンチ（5×2m）を設け、墳據を確認し、後円部径を確定した。

2トレンチ第9層と3トレンチ第7層が旧表土であり、その下は全て地山となる。墳丘より下の砂層は水の通り道となり、その場所の酸化・還元の状態により、色調の大きな変化が見られる砂層である。2トレンチの第16a層と第16b層の様な分層はその為であり、墳

丘の傾斜線ではない。墳丘部分はほぼ水平に計4層が、2・3両トレンチで同様に確認できた。下から上に、淡灰色系から暗色系へと変化し、砂粒が小さくなり、シルトが多くなる。崩落状況も堆積状況も2・3トレンチでは類似している。3つの崩落層が共に確認でき、黒褐色砂質層の堆積がその上にくる。2トレンチの崩落層は3トレンチの崩落層より崩落らしからぬ形になったが、上面を後世に削平されたと考えられる。3トレンチの墳丘のへこみも、自然崩落よりも後世の畦道等によるものと考えた方が妥当である。5トレンチは墳丘の大半がなくなり、わずかに墳据が残る。崩落層ではなく、堆積層だけが確認できた。周堀は、その高さの検討を要するが、現水田上面としても、堀としての深さは約40cmと浅い。2トレンチだけが、墳丘側から外に向かって周堀底が徐々に下がる。

この調査の最大の目的である墳据の確認であるが、各トレンチとも答えを出すことが出来た。多少の崩落・攢乱等が生じてはいるが、ほぼ平坦な周堀底から墳丘の斜面に変わることにおいて墳据とすると、セクション図の↑印の付いたところになる。各トレンチの墳据の標高は、2トレンチが2.941m、3トレンチが2.881m、5トレンチが2.868mで大きな差はなく、ほぼ水平であるといって良い。

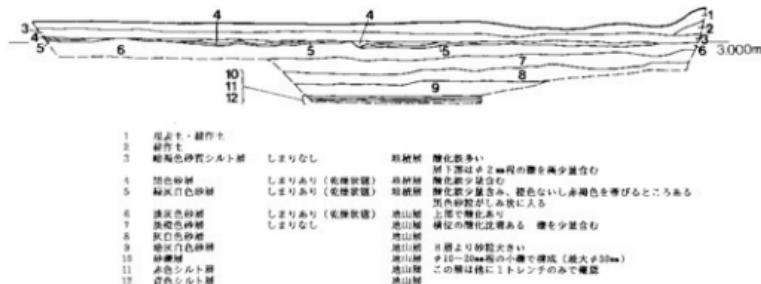
3) 周堀および外堤（図6-1・3、写真図版2上・3下）

1955年の調査時において指摘されていて周堀の存在を確認する作業も今回行われた。報文では「墳丘周囲の水田地区とそれを囲むごとく位置するやや高い帯状の畠地」の形状から盾形の周堀・外堤を推定しており、現在も調査当時の旧状を呈していると考えられたので、良好な状態で今日に至っていると思われた1トレンチの延長部分と4トレンチにおいて周堀から外堤の立ち上がりを検出することになった。4トレンチの規模は 12×2 mである。外堤の立ち上がりを確認する際の根拠となる周堀底と判断した上層は1トレンチでは青灰色砂層で、4トレンチにおいても色調はやや異なるものの同様の砂層が検出された。ただし、周堀底とした上層の上面はいずれも後世の耕作による起伏が上面に残されており、住時の周堀底面そのものであると断定することはできないが、この灰色砂層が周堀の底面もしくはそれに近い部分である可能性は高い。この上層は外堤の想定の根拠になった畠地の帯状の高まりの下へと続いて堆積しており、しかも高まりは耕作土の上に盛られていることが明らかになった。つまり、今回の1トレンチ・4トレンチの調査では外堤の立ち上がりを認めることができなかった。なお、4トレンチの12層中2箇所から流木が検出され、サンプルとして取り上げた後分析を行った。そのうち1点は、同定の結果、コナラ層コナラ亜種クヌギ節であった。また、別の1点については、¹⁴C年代測定を行い、 5090 ± 100 Y, B, P, (Gak - 18056) が得られている。

1 トレンチ



4 トレンチ



6 トレンチ



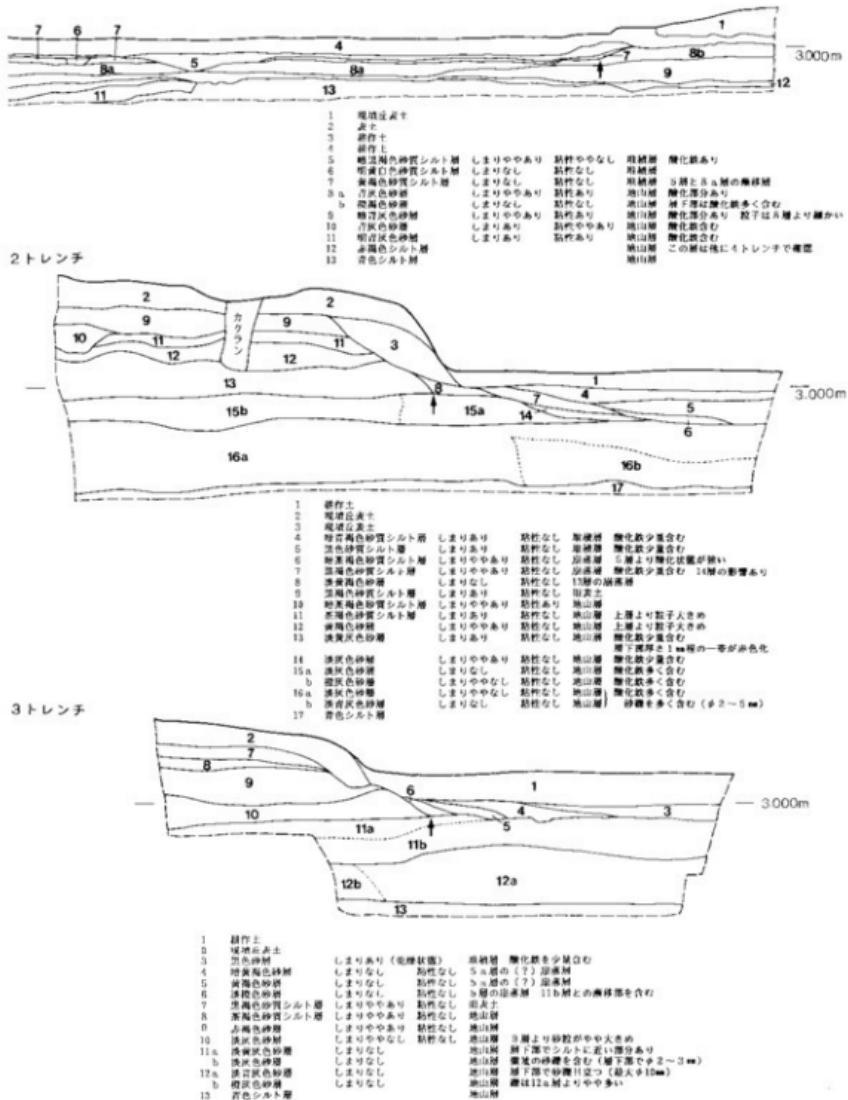
5 トレンチ



同じもの分層は酸化状態・色調観察のみによる分類で、同じ土番番号のaとbとは岩質のうえでは同じものである（図では点線で表現）

4 m 1・4トレンチ
2 m 2・3・5トレンチ

第6図 各トレンチ土層断面図



第3節 小 結

立地 現在、本古墳の西に「く」の字で古墳を取り巻く様に、鎌田川が南の霞ヶ浦へと流れている。この川の流域が従来かなりの移動性をもっており、より本古墳に近い所を流れている頃に出来た、自然堤防の西端付近の周辺より高い所を選んで立地している。

基本層序 標高約3.50~3.70mの黒褐色砂質シルト層以下はすべて地山層である。地山層の相違には次のことが影響を与えている。それは、水に影響されやすい砂の、酸化・還元の状態による色の違いである。酸化状態から還元状態への色は、赤一黄一白一青である。砂利を含む砂層（標高2.10~2.70m）の、墳丘直下で灰色系、水田下で淡青灰色系という違いを、通常の土層の違いとすると、墳据・周堀も間違った確認になる。分層を色中心で判断する事は危険なのであり、そこで質の変化を、より慎重に観察して分層した。

標高2m付近以下ではシルト層で、その上に砂利を含むしまりのない砂層になる。この層が水の通り道になる。この層の中では下にいくにつれて礫が多くなり、最下部は礫層といっておかしくない。上の層は砂利のない砂層になる。上層ほど砂粒は小さくなり、後円部で3層に分層できた。さらに上にはシルトを含む茶褐色砂質シルト層があり、その上にシルトをより多く含む黒褐色砂質シルト層（旧表土）がある。自然が作った層であるから、基本的に下にいくほど粒が大きくなる。また、色だけの分層は点線で表現した。

盛土の可能性を指摘できる層は6トレンチの第4層だけである。崩落と堆積の層は砂層か砂質シルト層で、各トレンチ間で類似していても全く同じ状況を呈してはいない。

墳丘とその復原 墳丘構築で、地山の整備・削平が今回の調査でうかがえた。旧表土上面は、2・6トレンチで最高3.80m、3トレンチが標高3.50m。厚さは6トレンチだけが厚い。後世の削平を考えると確実でないが、水平に整備したと考えて良かろう。

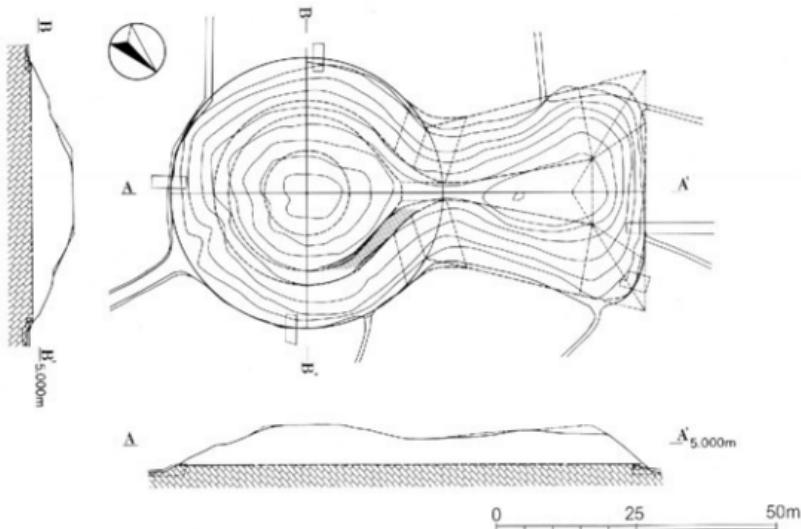
平面プランは墳丘崩壊以前の測量図と今回の測量図のテラスの表現・今回の発掘調査による墳据位置を使って復原した。確実なのが、後円部径が49.5mであるということである。他は多少の推察が必要となる。前方部の2つのトレンチの墳据から、一般的に見られる前方部の形態とは異なることが分かる。測量図の状況や、剣菱型は長大な前方部に存在することから、剣菱型や片直角の前方部である可能性よりも、図のような隅丸である可能性の方をとった。そうすると全長は85mで、これまで使われてきた数値と違わない。

段築に関しては、今回の測量図中に表現されたテラス部分を以前の測量図に合成して復原してみた（スクリーントーン部）。テラスはくびれ部付近で前方部側に多少広がる。1960年の報告書での復原と変わらず、後円部2段、前方部1段としか現在は推察できない。

復原は、後円部径以外に関して推測の域を出ないものとして点線で表現した。また使用した測量図は1960年報告書のものと異なるもので、多少の相違もある。特にこちらが良いということでなく、復原に際しての比較・検討の1材料にして頂ければ幸いである。

周堀とその復原 周堀形態については外堤の確認が出来なかったので、可能性としてはいくつか言えるであろうが、復原は出来ない。周堀底は、水田耕作等による変更は多少生じているが、ほとんど変化はない。また2トレンチ以外は、水平を保っている。特に堀を意識した堀込とみるよりは、単なる地山の削平と見た方が、現段階では妥当であろう。

今後の課題 今回の調査によって、後円部径の変更と、前方部形態の変更の必要性を示し得たわけである。今後、くびれ部や前方部隅角は平面プラン復元には必然であり、もちろん外堤を含めた周堀の調査も必要である。さらに墳丘内部の調査によって、単なる外形復原の他に、本古墳の墳丘構築の方法とその計画性を探ることもできる。今後の調査によって、端により正確な外形復原を行うだけでなく、この地に在る古墳“三味塚古墳”としての、立地や古糞の構築・形態上の特色を探ることができると期待している。



第7図 墳丘復原案図

第3章 1994年の調査について

第1節 墳丘の測量調査

今回の調査では円筒埴輪並びに形象埴輪の出土は数量的に少なくほとんどが小破片であるため、茨城県教育委員会『三昧塚古墳』(1960)における報告との照合も兼ねた。よって、以下に記述されている、ページ数・行数・章・節とは1960年の『三昧塚古墳』のものを目指す。

1. 円筒埴輪

第2第三節(P.19 8行目～P.20 10行目)によれば、墳丘には埴輪列が三重にめぐっており、後円部墳頂には埴輪円筒列が円形にめぐって、発掘された円筒埴輪は41個を数えるとされており、第五章第三節(1)(P.72)によると、中段あるいは袖部の列を加えると、70個ほどになるとある。しかし、今回の調査では、口縁部3、突帯2、底部2、計7個体を数えるにとどまり、何れも別個体の破片であった。そこで、当報告では、1960年の調査報告では資料化されていない、P.73挿図第31の円筒埴輪2個体の実測図を付け加えた。これはP.72の、高さ約50センチ、上部においてやや開き三本の隆起帯が認められ、この隆起帯の中間に、左右対照に円孔あるいは方孔が2個あいているが、円孔の例がほとんどで、器肉の厚さ1.5～1.8センチで焼成は普通、色調は赤褐色、表面には整形痕である刷毛目が継につけられている、と報告されている円筒埴輪である。1.口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。内面ヨコハケ。2.口縁部、外面磨滅が著しく判りづらい。内面口唇部ヨコナデ、3.口縁部、外面タテハケと思われる後、口唇部ヨコナデ。内面ヨコナデ。4.突帯、外面タテハケ後突帯ヨコナデ。内面タテ方向にナデその後ヘラケヅリの可能性あり。5.突帯、外面タテハケ後突帯ヨコナデ。内面ヨコ方向にナデしている。6.底部外面タテ及びナナメハケ。内面器面が剥落しているため、明瞭ではないが、ヘラケヅリの可能性がある。最下部には、制作時における作業面施設の痕跡がみられる。7.底部、外面は器面が剥離しているため1次調整については、はっきりしていないが2次調整はタテハケ。内面ナナメ方向にケヅリ。最下部は、制作時の台敷痕のようなものがみられ、さらに、ナデ調整がみられる。8.1960年報告に掲載された写真の埴輪(方形の通し孔を有するもの)、外面連続したタテハケ。突帯は何れもヨコナデ。内面は、下半部ヘラケヅリ、上半部タテ方向のナデ。最下部には、制作時に敷いたものと思われる棒状の痕跡がある。9.1960年報告に掲載された写真の埴輪(円形の透し孔を有するもの)、外面連続したタテハケ。突帯は、何れ

もヨコナデ。内面の調整は、簡単にナデた後、荒くヘラケズリを施す。最下部には制作台の痕跡と思われる棒状のくいこみがある。

2. 形象埴輪

第2章第3節（P.20 11行目～P.21 15行目）には、工事関係者の言を信ずるならば、人物埴輪は10数個体は立ち並んでいたとされており、動物埴輪は犬、猪、鹿、馬など10個体を下らなかつたらしく、合わせて20個体は越えていたようだ。今回の調査では形象埴輪の範疇に入ると思われる破片が2個出土しているが、1つは不明品、もう1つは馬形埴輪の鎧の輪部片かと思われるものである。第5章第3節（3）（P.76 16行目～P.77 12行目）によれば、2頭を下らない埴輪馬が存し、埴輪馬は飾り馬の表現であるがほとんど細片となっていた、とあるので、この破片があるいは関連性のあるものとして考えられなくもない。10.形象埴輪、器種不明品、外面の調整は不明。内面には調整を施されず、粘土帶の隆起がそのままになっている。11.形象埴輪、鎧の輪部片か。輪部は断面台形

3. 朝顔形埴輪

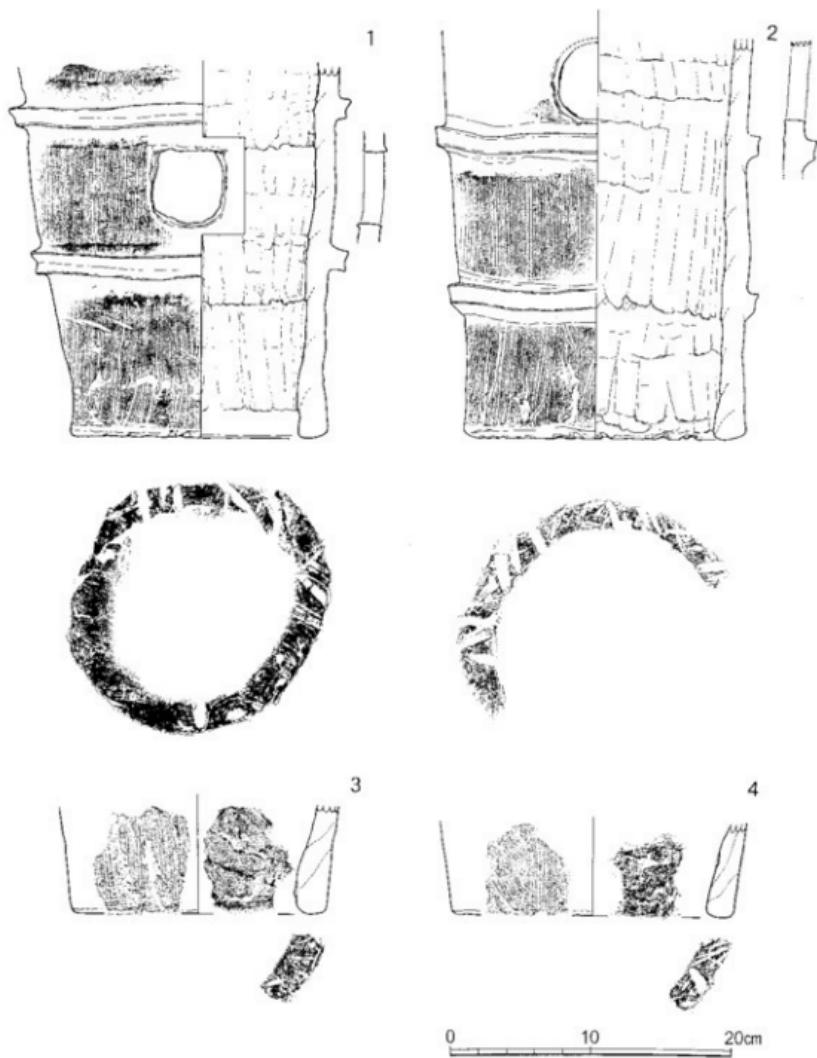
第5章第3節（P.73 2行目）に、円筒の資料の中には、いわゆる朝顔形円筒埴輪は認められないとあるが、今回の調査でも確認されておらず、朝顔形円筒埴輪が出土しないというのは妥当な見解だろう。

以上埴輪に関しては、1960年における報告から大きくそれる見解はないものと考えられる。なお、詳細は観察表に譲る。

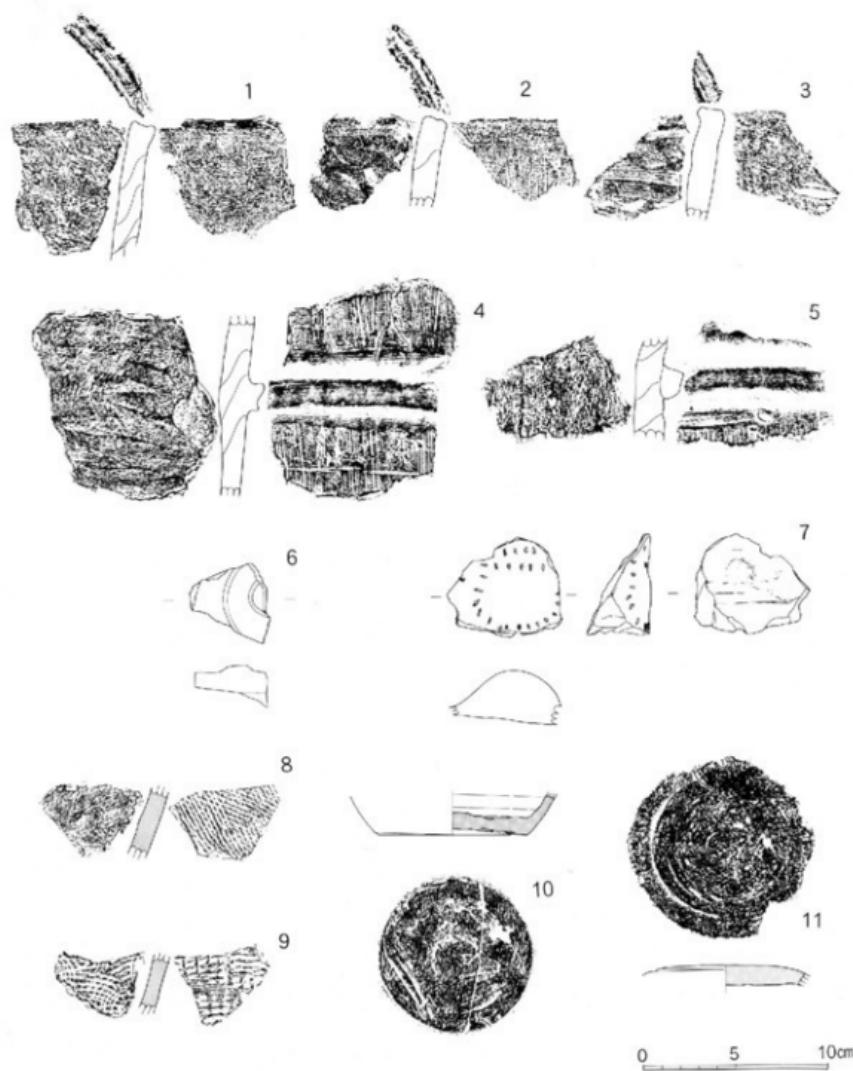
第2節 土 器

総計約150片の出土土器の内、縄文土器1片、須恵器16片で、大半は土師器が占める。縄文土器は1トレンチ周堀底下の暗青灰色砂層（第9層）より出土し、器面が荒れ、文様等は不明。須恵器は全て表土より出土。器形の復元が可能な2片の杯身と杯臺は、共に本古墳築造期の7世紀後半のものではなかろうかと考えられる。

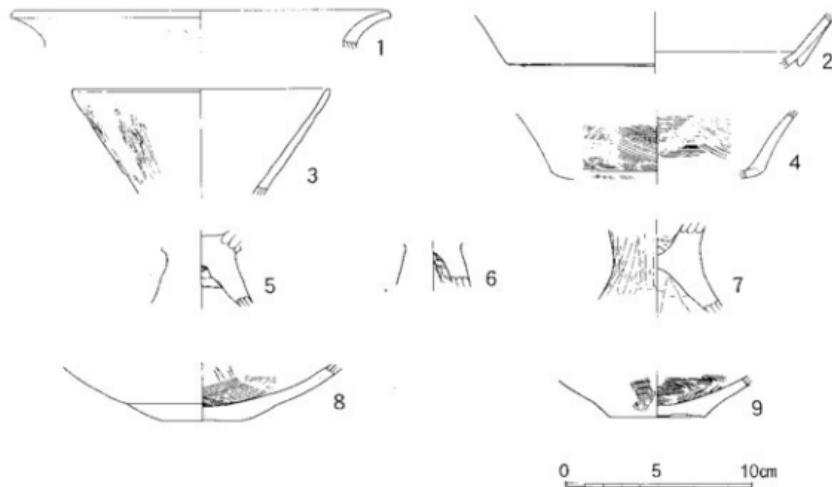
土師器片は、1トレンチ約7片、2トレンチ約19片、3トレンチ1片、4トレンチ約5片、5トレンチ約18片、6トレンチ約73片である。大半が表面採集（観察表では表探と表示）や表土からの出土で、3トレンチの1片（図10-7）と6トレンチの数片は旧表土から出土した。複合口縁（図10-2）も出土位置から、旧表土上面とも考えられる。器形がある程度分かるのを図10に載せたが、4・5・6・7・8は和泉式であろう。2トレンチ複合口縁（2）は縄文等の施しがない事、3トレンチ台付壺（7）は全部範削りである事



第8図 1955年(1~2)、1994年出土主要遺物?円筒埴輪(3~4)



第9図 1994年出土主要遺物(2) 円筒埴輪(1~5)、形象埴輪(6~7)、須恵器(8~11)



第10図 1994年出土主要遺物A 土師器

を根拠に、弥生土器でなく土師器とした。小片の大半も高杯か壺で、見解に影響を及ぼすものはない。以上の様に、大半の上師器片は本古墳築造以前のもので、供獻土器は確認出来なかつた。また数片は旧表土より出土し、古墳築造以前、この微耕地に人の生活があつた事がうかがえ、本古墳の下に住居跡等がある可能性もでてきた。

第1表 1994年出土主要遺物観察表

(総論)

種類	図版番号	出土地点	部位	特徴	色調	1 胎土 2 焼成	備考
1 円筒	図9-2	2トレンチ 表土	口縁部	外 タテハケ 内 ヨコナデ	棕褐色	1 1cm~3mm小石 2 良好	口縁端部にナデによる幅約3mm、深さ約1mmの凹みあり
2 円筒	図9-1	1トレンチ 表土	口縁部	外 タテハケ? 後ヨコナデ 内 ヨコナデ	黄褐色	1 1cm~3mm小石 2 ややもろい	同上 外面摩滅著しい。
3 円筒	図9-3	5トレンチ	口縁部	外 タテハケ後ヨコナデ 内 ヨコナデ	暗褐色	1 白色粒 2 良好	内面は昔いナデによりヨコ方向の凸凹が著しい。
4 円筒	図9-5	後円部表探	突帯	外 タテハケ後 突帯部ヨコナデ 内 ヨコナデ	暗黄褐色	1 1cm~3mm小石 2 良好	突帯の断面は台形を呈する
5 円筒	図9-4	表探	突帯	外 タテハケ後 突帯部ヨコナデ 内 ヨコナデ	黄褐色	1 赤色粒 2 棕褐色粒 良好	両面ナデでヨコ方向の凸凹著しい。 親指を添えた右手四本でナデ。

6 円筒	図8-4	3トレンチ	底部	外 内 タテ・ナナメハケ ハラケズリ			内面は器面が剥落しているため不明瞭
7 円筒	図8-3	5トレンチ 表土	底部	外 内 2次調整はタテハケ ナナメのケズリ	淡黄褐色	1 磁 2 良好	1次調査不明
8 円筒	図8-1	1955年調査	完形	外 内 連續したタテハケ 突堤と他の若干ヨコナデ ハラケズリ・タテナデ	赤褐色	1 自然 2 良好	方形透孔で穿孔時の工具の 切れ目残る。最下段に上から の粘土の被覆あり。
9 円筒	図8-2	1955年調査	完形	外 内 連續したタテハケ 簡単なナデの後 細いハラケズリ	赤褐色	1 石英 2 良好	円形透孔。穿孔時の粘土の めくれあり。突堤貼付假有。 実測図は一部復元
10 形象	図9-7	5トレンチ	不明	外 内 不明 調整なし (粘土帯の隆起残る)	赤褐色	1 白色砂粒 2 良好	長さ5.2×6.1cm、器面や荒 れる。前突めぐり断面馬の背 状。周縁は全て削れ口
11 形象 馬	図9-6	5トレンチ	鏡 の輪部	不明	明赤褐色	1 石英 2 良好	周縁は全て削れ口

(土師器・須恵器)

器種	図版番号	出土地点	部位	法量(cm)	特徴	色調	1 粘土 焼成	備考 (残存率)	
1土師 壺	図10-2	2トレンチ 表土(隕土?)	口縁部	最大径 残存高	19.3 2.8	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	黄褐色 に背面赤彩	1 長石 2 良好	複合口縁 (15%)
2土師 壺	図10-8	6トレンチ 表採	底部	底径 残存高	4.0 2.9	外 内 ヨコナデ 底部ハケ 底部ハケ後ナデ	橙黃褐色 外面一部に 赤彩残る	1 褐色粒 2 良好	同一個体片 あり(40%)
3土師 壺	図10-8	6トレンチ 表採	底部	底径 残存高	5.1 2.0	外 内 タテハケ後ナデ ハラケズリ	外 内 赤褐色 黒褐色	1 褐色粒 2 良好	(15%)
4土師 壺	図10-1	6トレンチ 表土	口縁部	口径 残存高	20.1 16.5 2.1	外 内 ヨコナデ 他 ハケ後ナデ ヨコナデ	暗褐色 内 黄褐色	1 褐色粒 2 良好	(20%)
5土師 台付甕	図10-7	3トレンチ 旧表土	接合部	接合径 残存高	4.5 4.4	内外全面ハラケズリ	暗赤茶褐色	1 白粒 2 良好	(100%)
6土師 壺	図10-3	6トレンチ 表土	口辺部	口径 接合径 残存高	13.8 6.7 5.7	外 内 ハラミガキ 接合部附近 ナデ ハラケズリ後ナデ	白みの強い 黄褐色	1 白色粒 2 良好	同一個体片 あり(40%)
7土師 高杯	図10-4	6トレンチ 表採	杯部	縦横部径 残存高	11.4 3.6	外 内 ハケ 下部ハラミガキ	暗褐色	1 白色粒 2 良好	(15%)
8土師 高杯	図10-5	1トレンチ 表土	脚柱部	接合径 残存高	3.7 3.9	外 内 ヨコナデ 杯底ナデ 脚奥ケズリ他ナデ	白黄褐色	1 白色粒 2 良好	(90%)
9土師 高杯	図10-6	6トレンチ 周縁覆土	脚柱部	接合径 残存高	3.0 2.3	外 内 ナデ ハラケズリ	赤黄褐色	1 白色粒 2 良好	(90%)
10須恵 甕	図9-8	4トレンチ 表土	胴部	残存高	3.5	外 内 平行タタキ 格子タタキ 同心円文アテ具	灰色	1 白色・砂粒 2 良好	
11須恵 甕	図9-9	表土	胴部	残存高	3.3	外 内 平行タタキ 格子タタキ 同心円文アテ具	灰色	1 白色・砂粒 2 良好	
12須恵 蓋	図9-11	1トレンチ 表土	天井部	天井部径 残存高	8.3 1.1	外 内 回転ナデ 回転ナデ	濃灰色	1 白色・砂粒 2 不良	外側中央に ケズリ(紐 あり?)
13須恵 杯	図9-12	1トレンチ 表土	底部	底径 残存高	8.1 2.2	外 内 回転ナデ 回転ナデ	灰色	1 白色・砂粒 2 良好	外側自然釉

第5章 三昧塚古墳築造前後の古環境

1. はじめに

三昧塚古墳の発掘調査に伴い、古墳築造前後の古環境について分析調査を実施したのでその概要を報告する。

今回の発掘調査では、三昧塚古墳の墳頂や周堀の本来の規模を確定することに主眼がおかれて、堀を中心にトレンチが設定された。1994年4月2日に当社技師が現地調査を行ったところ、周辺の古墳が台地上に立地するのに対して本古墳は沖積低地の微高地上に立地しており、堀内覆土はいわゆる水つき状態であった。このような堆積物中には、古環境を反映する微化石が遺存していることが期待された。そこで、協議のうえ古墳築造当時の堀内の水域環境と周辺の古植物を検討する目的で、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行った。また本遺跡が立地する微高地の形成年代や形成因、古墳築造以前の古環境を推定するため、墳丘盛土直下の旧表土や周堀の地山について珪藻分析・植物珪酸体分析・¹⁴C年代測定・樹種同定を行った。なお本稿は、1995年3月に玉造町教育委員会へ提出した「三昧塚古墳自然科学分析報告」の内容を抜粋したものである。詳細は原報告にゆだねたい。

2. 試料と分析調査方法

調査対象として、第1・第2・第6トレンチを選定し、試料採取を行った（図11～13）。その中から以下の試料選択を行った。

前方部の第1トレンチでは、堀内の水域環境や周堀開口時の周辺植生を推定するため、底直上に堆積する第7層について珪藻分析・植物珪酸体分析を行った。また、第6トレンチでは古墳築造以前の古植生を検討するため、盛土直下の第9層（旧表土）について植物珪酸体分析を行った。また、後円部の第2トレンチでは、古墳築造以前の古植生を検討するため、盛土直下の第10層（旧表土）について植物珪酸体分析を行った。一方、周堀部では地山の第16b層および堀覆土の第6～4層について、堆積環境の変化を確認するため珪藻分析を行った。また、古植生の変化を確認するため第6・5層について花粉分析と植物珪酸体分析を行った。また、第4トレンチ第16b層より出土した流木（材1・材2）のうち、材1については¹⁴C年代測定を行い古墳の立地する微高地の形成年代を確認し、材2については樹種同定を行い古植生推定の参考とした。なお分析方法については割愛する。

3. 周堀の水域環境と古植生

珪藻分析の結果（図11）、化石数が少なく保存状態の悪い試料もあったが、周堀底直上の堆積物から沼沢地や湿地で多く見られる珪藻化石が検出された。また、水湿地生植物で

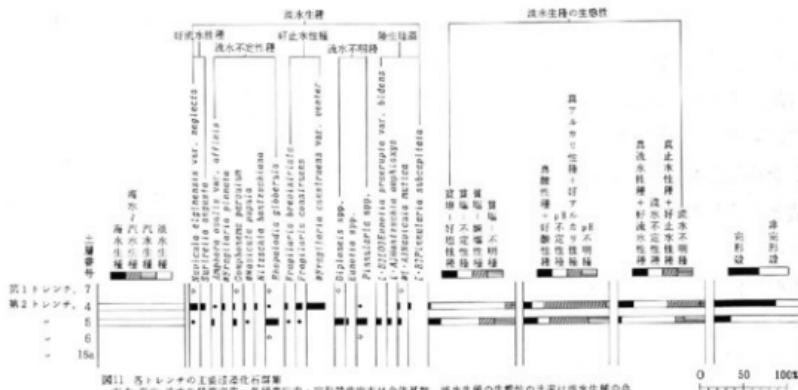


図11 各トレンチの主要な水生植物
左側: 第1トレンチ、右側: 第2トレンチ
調査対象種群: (●) 流水生植物、(○) 流水不生植物、(△) 流水生植物+流水不生植物
記号説明: (●) 流水不生植物、(○) 流水生植物、(△) 流水生植物+流水不生植物
調査対象種群: (●) 流水生植物 (安藤, 1980)
右側: 水生植物、(●) 流水生植物 (安藤, 1980)
〔-〕: 流水生植物 (伊藤・高木, 1981)

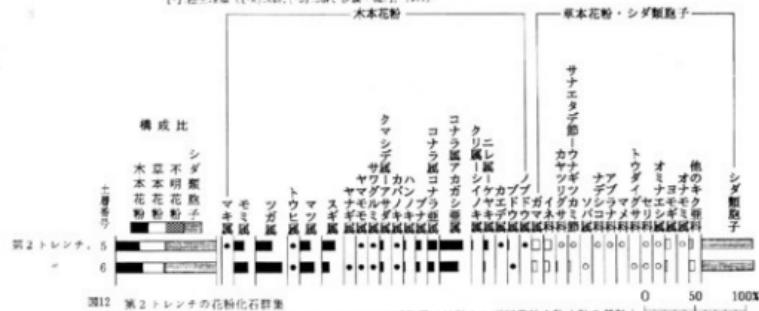


図12 第2トレンチの花粉化石群集
山根率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基準と
して算出した。なお、●○は1年花粉の出現を示す。

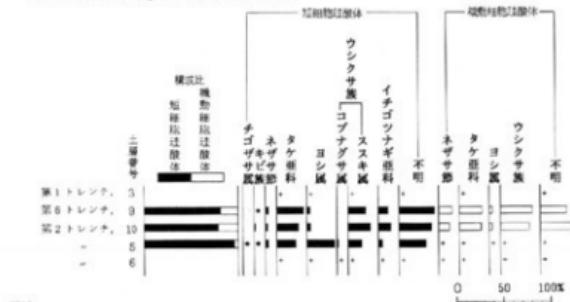


図13 各トレンチにおける主要な植物性被体種類
出現率は、細胞壁被体と表面被毛被体の総数をそれぞれ百分率で算出した。なお、●は1年率
●: 細胞壁被体の総数が100%未満、表面被毛被体の総数が100%未満の試料で出現した種類を示す。

あるガマ属の花粉化石やヨシ属の植物珪酸体が検出された。以上より、周堀内は沼沢地や湿地のような水域であったことがわかる。また、第2トレンチの第4層では珪藻化石の保存が良く、止水域に特徴的な種群が検出されたことから、周堀の埋積が進んだ段階で周堀内は池のような水域となっていたと考えられる。なお、近傍では霞ヶ浦西岸の富士見塚古墳の周堀の分析調査で覆土より陸生珪藻が多産したことから、空堀のような状態であったことを指摘した。(パリノ・サーワイ株式会社 未公表)。このような差は、おそらく本古墳と富士見塚古墳との立地差(前者が沖積低地の微高地、後者が台地上)によると考えられる。

周堀底直上の堆積物の花粉化石群集(図12)から、本古墳が築造された頃、周辺の台地などの森林は、現在照葉樹林の主構成要素となるアカガシ亜属や温帶性針葉樹であるスギ属・モミ属・ツガ属等で構成されていたと考えられる。この様な植物相は縄文時代中期以降南関東地域で拡大したと確認され(辻、1989など)、気象の冷涼化・湿润化に起因すると考えられている。なお、周堀内堆積物より栽培型のイネ属やソバ属の花粉化石が検出され、当時本古墳周辺や鎌田川の上流域等でこれらの栽培が行われたことが推定される。

4. 古墳築造以前の古環境

墳丘盛土直下の旧表土からは、タケ亜科やウシクサ属が多産している(図13)。このような傾向は、台地上に立地する古墳でも認められている。ススキ属を含むウシクサ属の検出は、本古墳周辺に比較的開けた空間があったことを示唆し、台地上の古墳との景観の共通性を暗示させる。しかし、本古墳の場合湿润な場所に生育するヨシ属の植物珪酸帯が旧表土より検出されたことから、微高地上は部分的あるいは一時的に湿润化した可能性がある。なお、堀底より下位の地山第16b層では珪藻化石がほとんど検出されなかつたので、その堆積環境はよくわからないが、層相で砂で発掘調査時にはその上位より出水があったこと、標高などから、基本的には湿润な環境であったと考えられる。いずれにしても、古墳築造以前の微高地は比較的湿润で在ったと考えられるこのような場所に古墳を築造した理由は、今のところよくわからないが、地下水位の高いところを利用して周堀への水の充填を容易にするなど何らかの利点があったのだろう。

〈引用文献〉 直接引用したもののみ記した。

辻 誠一郎(1988)「植物と気候」

『弥生文化の研究Ⅰ 弥生人とその環境』P160-173、雄山閣

ま　と　め

三昧塚古墳は、不用意な土取り工事によって前方後円墳の西側、すなわち霞ヶ浦に面した部分が削り取られてしまった。急速、茨城県教育委員会が対応して、学術的な発掘調査を実施した。昭和30年春まだ浅い頃であった。幸い、墳丘の損傷にもかかわらず、内部主体は完存していて、良好な箱形石棺（長持形石棺）が発見され、石棺の内外から豊富な副葬品も検出された。

このたびの三昧塚古墳復原整備を目的とする調査は、墳丘周辺の調査によって、三昧塚古墳の規模、墳丘の構造、周堀の規模その状況を把握するため実施した。調査の成果については本文中に記述してあるので重複をさけるが、若干の私見を述べてみよう。

三昧塚古墳は、霞ヶ浦沿岸地域では群を抜いた規模と豊富な副葬品をもつ最有力古墳である。副葬品中に見られる馬形飾付冠は、わが国古墳出土品としては第一級のものである。石棺内に安置された遺骸頭部にあり、被葬者の頭部に付着されていたことはほぼ間違いのないことと考えられる。冠や冠帽のいくつかの例の中で、遺骸への装着状態が判明している例として貴重な存在もある。

二面の鏡は、いずれも倣製鏡であるが、大形のものは中国製神獸鏡の面影をよくのこしていく、銅質、鋳上りとも良好であり、倣製鏡としては質が高い。制作年代は5世紀代と推定されるから、後に述べる三昧塚古墳の築造年代と照合すると、伝世品である可能性がきわめて強い。一方の小形鏡は、一般的には乳文鏡と呼ばれているものである。しかし、詳細に検討すると8乳があり、各乳は乳座部分が細線による双脚文である点を考慮すると、中国鏡の中ではそのモデルとなるではなく倣製鏡として独自な進展をとげた珠文鏡や乳文鏡の系統をひくものとみてよい。古墳時代全体の中でみると、本鏡も5世紀代にその鋳造がなされたとみるべきものであるが、先の倣製神獸鏡よりはむしろ後出のものであろう。東日本では、初期群集墳の副葬品として登場する乳文鏡の例がみられるところから、三昧塚古墳の被葬者が、なお独立的な大型前方後円墳の被葬者の系列に属する人物と推定してみると、東日本の古墳時代社会の政治的な側面が浮き彫りになってくる。すなわち、地方王権の主人公が、やがて登場する群集墳の被葬者を掌握するような、後期古墳時代の重層的政治体制の先駆的役割を演じたことを推測させるのである。

三昧塚古墳のさらなる特徴としてあげるべきは馬具の副葬である。古墳時代を通して、馬具副葬の開始は、須恵器の登場とともに重要な劃期である。日本列島にはもともと馬はないから、馬具の存在は間接的に騎馬の風習の伝来を意味する。馬が戦略的に有効的な

ものあることはいうまでもないが、古墳の副葬品としてみられるものは、殆どが飾り馬用のもので、どちらかといえば儀礼的な色彩が強い。古墳被葬者が生前に飾り馬に跨り儀礼を統率している姿を想像することもできる。しかし、ここで馬具をとりあげることの意味は、馬具の種類や各々の形式を検証することで、三昧塚古墳の築造年代や被葬者の性格を知る手がかりが、そこにあるからである。

三昧塚古墳出土の馬具は、石棺外に設置された副葬品用の副櫛から横矧板銛留短甲、大刀、鉄鎌などともに出土した。f字型鏡板付帯1、方形飾金具27、銛具2である。馬の頭部を飾るものに限られていて、鞍、鎧、杏葉などを欠いている。飾り馬の馬装全体が完備していない。このことは、日本古墳の中で、馬具が出現しはじめる頃には一般的な傾向であるから、当時の日本ではまだ騎馬の風習が完全に定着していたとは云い切れないという考え方方ができる。

27点の方形飾板は、一辺2.3×2.5cmの金銅製のもので、四隅に銛を打ち、おそらく面繫のベルトに装着したものであろう。銛具2点は面繫ベルトを締めるためのバックルであろう。面繫金具によってその全容を知ることができる資料として重要である。

これら副葬品の組成からみると、三昧塚古墳の築造年代は西暦6世紀初頭を降ることはないと考えられる。このことは、全国的な視野をもって、馬具を副葬している古墳との年代的な比較検討によって得られることである。三昧塚古墳が全国的なレベルの古墳であり、その被葬者も、したがって東日本において重要な位置を占めているという証拠にもなる。

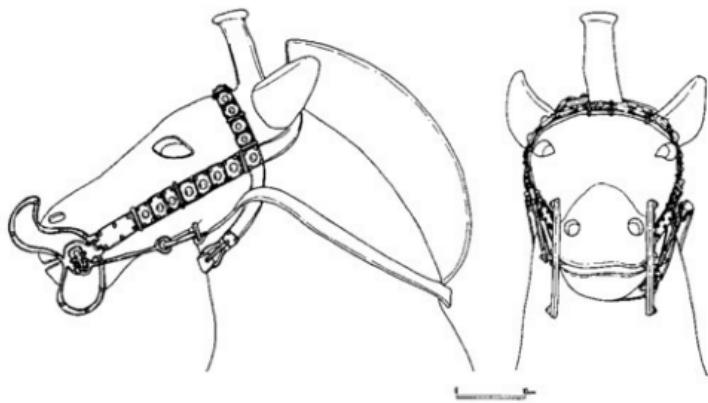
三昧塚古墳には、墳丘に樹てられている埴輪群がある。埴輪には、円筒埴輪の他に人物埴輪や動物を象った埴輪がある。しかし、他の器財埴輪が存在しない。周辺の古墳例からみると、猿の埴輪を出土した沖洲・大日塚古墳があり、年代的な接近を推定できるものの、他の比較検討材料がない。玉里村上玉里の舟塚古墳には、円筒・人物のほかに家、盾などがあり、三昧塚古墳と比較してもその内容が豊富になっていることに気付く。大日塚・舟塚の2古墳よりも、三昧塚古墳が年代的に若干先行するものと考えている。

三昧塚古墳は、築造当時、おそらく霞ヶ浦の岸辺に近い場所ではなかったかと推定される。墳丘をめぐる周堀も平面からみると盾形を示しているが、その深さは以外に浅い。低い丘陵の末端が緩傾斜になって霞ヶ浦に至る、そのやや平坦部を利用して築造されているから、ことさら深い周堀を必要としなかったのだろうか。墳丘をより壮大にみせるための工夫を必要としないくらい、湖岸に近く占地させたような気がする。

西暦5世紀代から6世紀前半にかけて、全国各地の有力古墳の墳丘は壮大化し、他の古墳との較差を大きくする傾向がある。霞ヶ浦周辺は、大形古墳の変遷が系譜的に追求できる地域もある。その中でも、三昧塚古墳はその中心として位置し、後続する高浜舟塚山

古墳へと連接する。舟塚山古墳の全体像が墳丘を除いて不明確なので、いま直ちに比較でききないのが残念であるが、舟塚山古墳をピークとして前方後円墳が縮小化の傾向を辿ることは明らかである。

霞ヶ浦周辺の古墳が陸上、水上交通の要衝を把握した歴代の地方王権の首長墓として位置付けられると推定されることとあわせて、三昧塚古墳とその被葬者を考えたい。



第14図 三昧塚古墳出土馬具装着状況復原図
(宮代栄一 1996「古墳時代における馬具の曆年代」『九州考古学』第71号より引用)



三昧塚古墳航空写真（1974年頃、南西より）

第一図版 航空写真



第二図版 三昧塚古墳前方部トレンチ



1. 第1トレンチセクション（西より）



2. 第6トレンチセクション（西より）

第三図版
三昧塚古墳後方部トレンチ



1. 第3トレンチセクション（東より）



2. 第4トレンチセクション（東より）

第四図版
三昧塚古墳後方部トレンチ

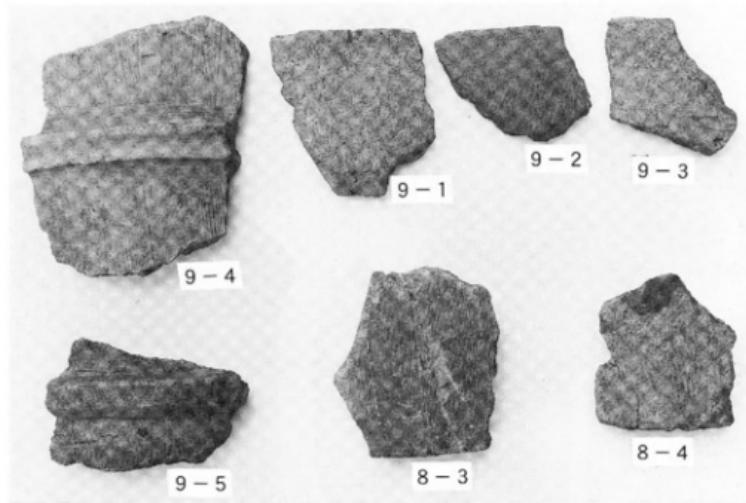


1. 第2トレンチセクション（西より）

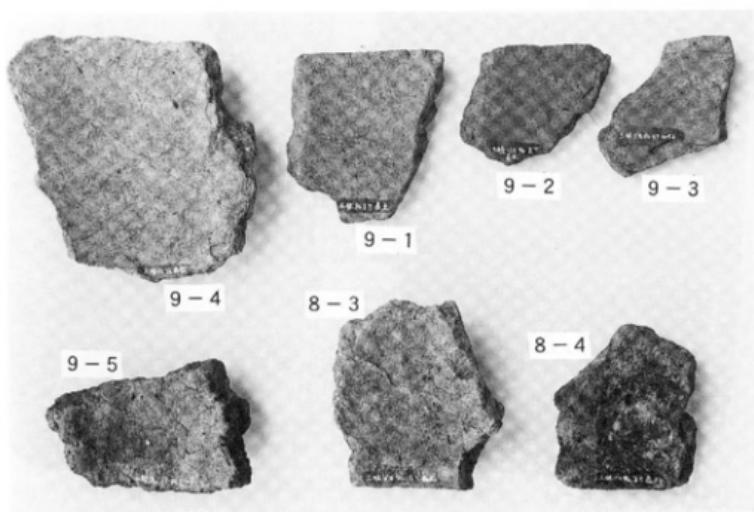


2. 第5トレンチセクション（西より）

第五図版 出土埴輪

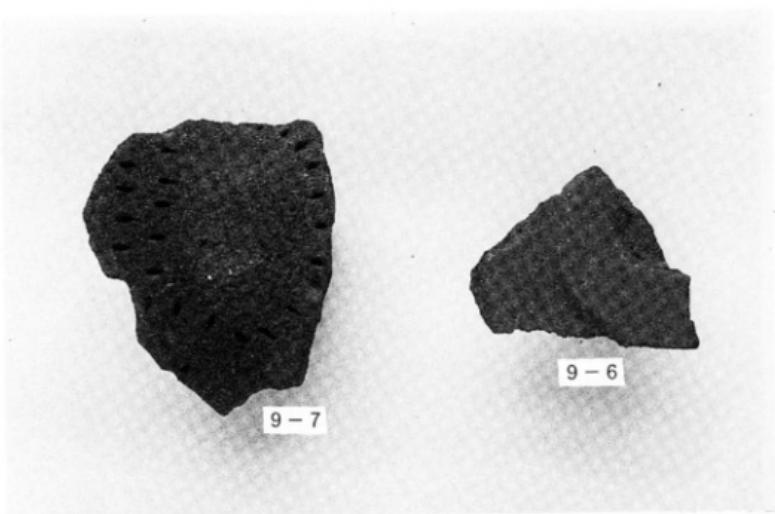


1. 1994調査出土円筒埴輪片（表面）



2. 1994年調査出土円筒埴輪片（裏面）

第六圖版 出土埴輪

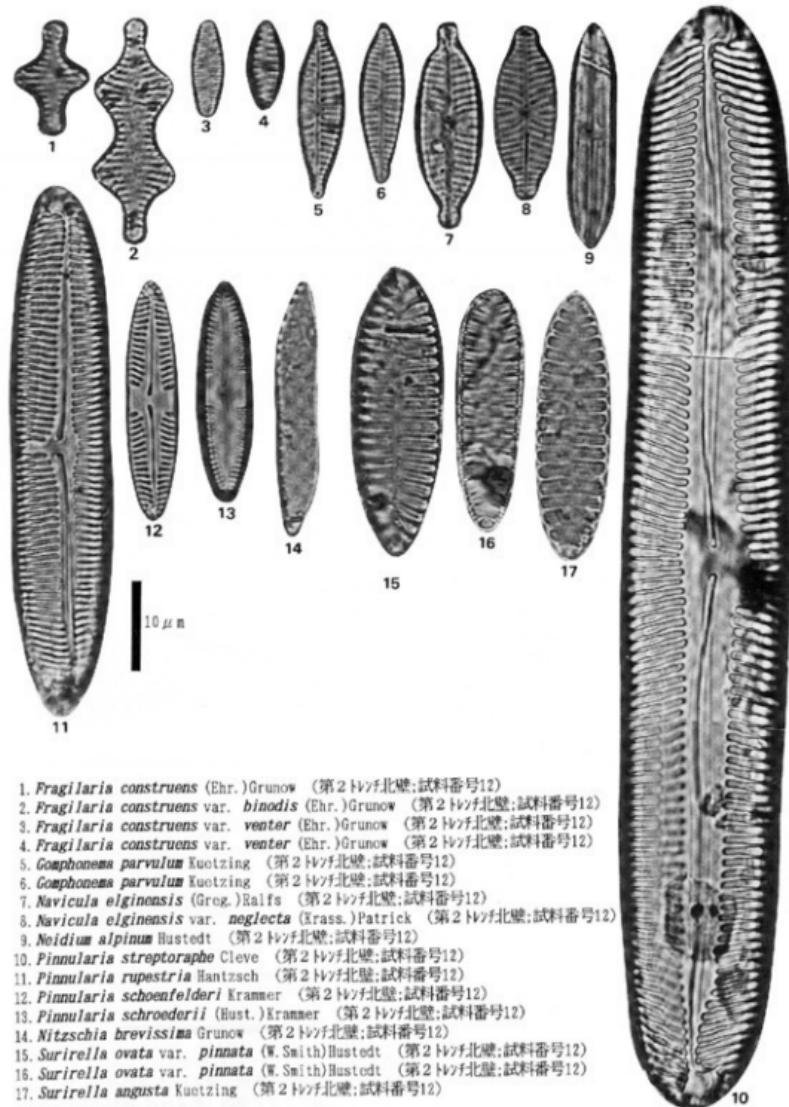


1. 1994年調查出土形象埴輪片



2. 1955年調查出圓筒埴輪

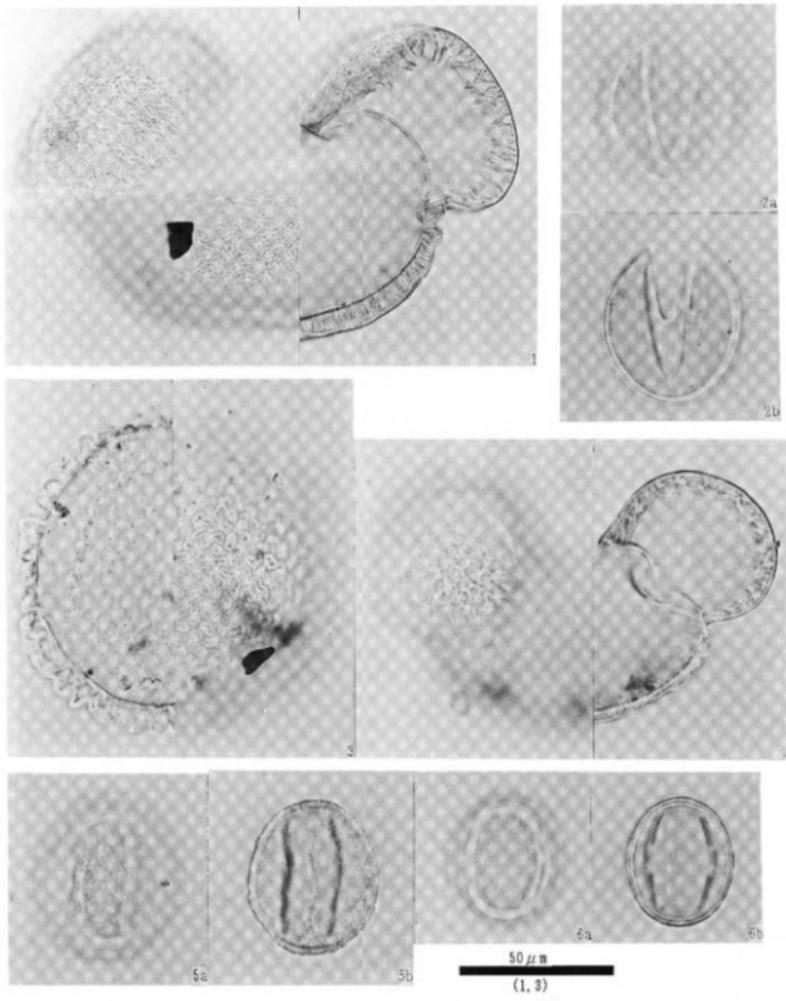
第七図版 珪藻化石



1. *Fragilaria construens* (Ehr.)Grunow (第2トツフ北壁; 試料番号12)
2. *Fragilaria construens* var. *binodis* (Ehr.)Grunow (第2トツフ北壁; 試料番号12)
3. *Fragilaria construens* var. *venter* (Ehr.)Grunow (第2トツフ北壁; 試料番号12)
4. *Fragilaria construens* var. *venter* (Ehr.)Grunow (第2トツフ北壁; 試料番号12)
5. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (第2トツフ北壁; 試料番号12)
6. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (第2トツフ北壁; 試料番号12)
7. *Navicula elgineensis* (Grog.)Rafts (第2トツフ北壁; 試料番号12)
8. *Navicula elgineensis* var. *neglecta* (Grass.)Patrick (第2トツフ北壁; 試料番号12)
9. *Noedium alpinum* Hustedt (第2トツフ北壁; 試料番号12)
10. *Pinnularia streptoraphe* Cleve (第2トツフ北壁; 試料番号12)
11. *Pinnularia rupestris* Hantzsch (第2トツフ北壁; 試料番号12)
12. *Pinnularia schoenfelderi* Kramer (第2トツフ北壁; 試料番号12)
13. *Pinnularia Schroederii* (Hust.)Kramer (第2トツフ北壁; 試料番号12)
14. *Nitzschia brevissima* Grunow (第2トツフ北壁; 試料番号12)
15. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W.Smith)Hustedt (第2トツフ北壁; 試料番号12)
16. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W.Smith)Hustedt (第2トツフ北壁; 試料番号12)
17. *Surirella angusta* Kuetzing (第2トツフ北壁; 試料番号12)

第八図版
花粉化石

(1)

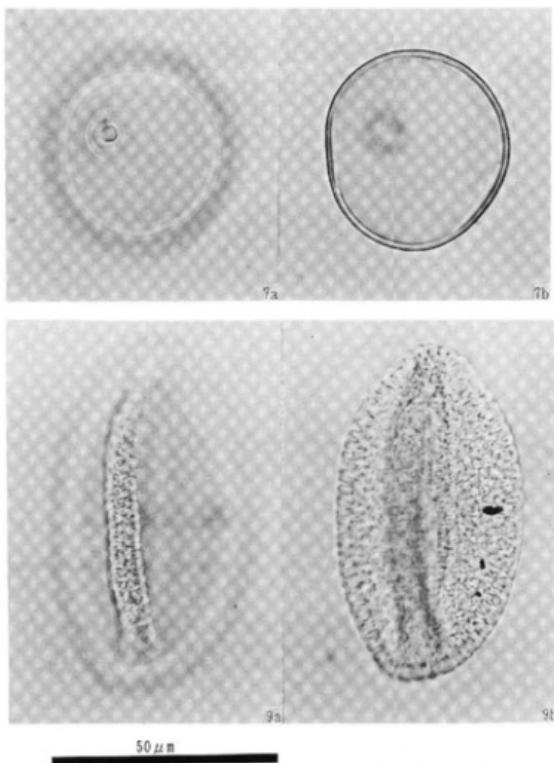


1. ソミ属 (第2トレン; 試料番号15)
3. ツガ属 (第2トレン; 試料番号15)
5. コナラ属コナラ亜属 (第2トレン; 試料番号15)

2. スギ属 (第2トレン; 試料番号15)
4. マツ属複維管束亞属 (第2トレン; 試料番号15)
5. コナラ属アカガシ亜属 (第2トレン; 試料番号15)

第九図版

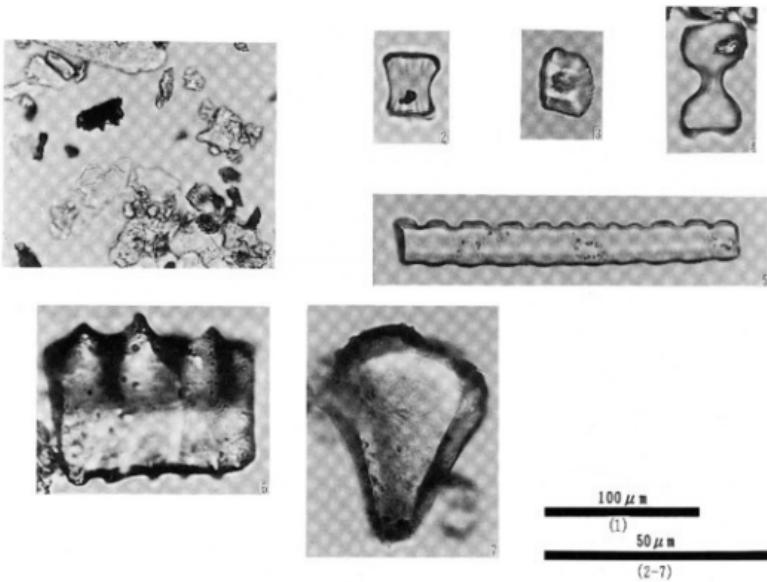
(2)



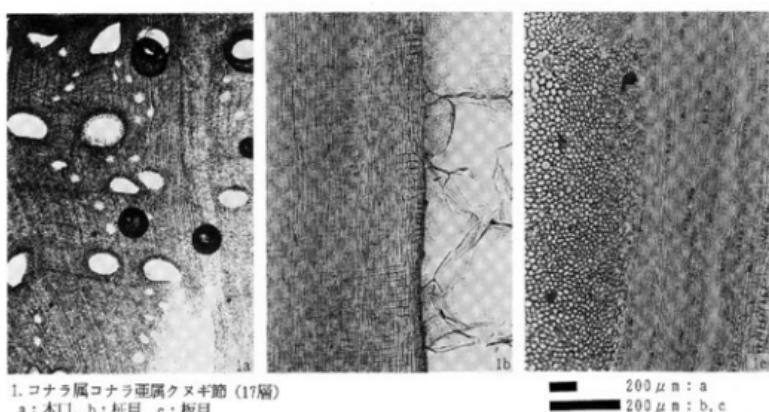
7. イネ科 (第2トロフ; 試料番号15)
9. ソバ属 (第2トロフ; 試料番号16)

8. ガマ属 (第2トロフ; 試料番号15)

第十図版 植物珪酸体・材の顕微鏡写真



7. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (第2トク北壁; 試料番号1)
2. ネザサ節短細胞珪酸体 (第1トク; 試料番号10)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (第1トク; 試料番号10)
6. ネザサ節機動細胞珪酸体 (第2トク北壁; 試料番号16)
8. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (17層)
- a : 木口, b : 杠目, c : 板目



三昧塚古墳発掘調査報告

1995年3月31日

編集 明治大学

発行 玉造町教育委員会

玉造町遺跡調査会

印刷 (株)さんゆう社印刷

